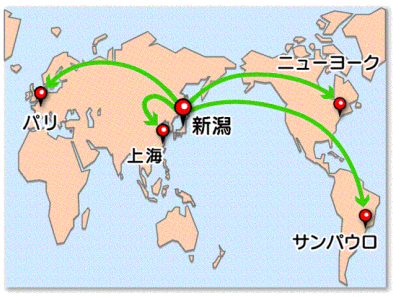
掲載日:2017年09月04日, 面名:解説, 記事ID:KIJ20170904_M000900100AQ02001
(C)新潟日報社

グローバル にいがた

国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



第1月曜掲載

from パリ

レオナール・ミノリさん
＝新潟フランス協会パリ支部会員＝

映画を愛し集う人々

〝映画の父〟と呼ばれたリュミエール兄弟によって映画が発明されたフランス。世界初の有料映画上映が行われたのは1895年のパリ。オペラ座に近い瀟洒なホテルにその事実が記された銘板がある。随分前に訪ね、映画に携わる者として映画の父へ感謝を告げた。日本文化事業の世界展開を掲げた経済産業省の国際共同映画製作プロジェクトにより、各国の映画祭で仕事をし始めた頃だった。当時プロデューサー陣で最年少だった私にとって、カンヌ映画祭での感動は今も忘れ難い。

今年、70周年記念となるカンヌ国際映画祭に参加した。スターたちが登場するレッドカーペットは華と熱気に満ちていた。

一帯の会場内は映画ビジネスの場だ。世界中の映画人が集結するこの場から未来の映画が生まれる。国際ビレッジの日本パビリオンは日本の関係者との再会の場でもあるが、かつては日本から共に来ていた。今ではその監督、俳優らがレッドカーペットを歩み、欧州の映画祭で新旧交えて日本映画の上映が増した。受賞や上映後には「おめでとう、日本!」「感動をありがとう」と声を掛けられる。フランスに住んでからなお誇らしく、うれしく思う。

世界三大映画祭の一つであるカンヌ映画祭は5月の美しい南仏を堪能できるが、パリはより開かれた映画祭が多彩だ。

9月は「エトランジェ=奇妙な」と冠されたエトランジェ映画祭が控えており、欧州でカルト的人気を誇る。6月はシャンゼリゼ通りがシネマ通りになる。凱旋門を目の前に映画も音楽も楽しめるパーティーは、シャンゼリゼ映画祭らしい粋な計らいだ。7、8月の夏休み期間、無料上映されるラヴィレット野外映画祭では広い芝生の上でピクニック、寝転んでくつろぎ観賞する姿もあった。食を題材にした邦画「あん」「タンポポ」も上映され、パリの人たちと日本の話題で盛り上がった。

一本の映画から話に花が咲く。映画の祭りに人々が集う。その景色を〝映画の父〟がほほ笑んで見守っていることだろう。

(レオナール・ミノリさんはフランスを拠点に映画や企画のプロデュースをしています)

70周年記念を祝うカンヌ国際映画祭

from 上海

猪股　賢児さん
＝上海新潟県人会会員＝

自分らしさを求めに

地下鉄3本が乗り入れ、若者に人気が高い街、徐家匯。昨年末、この徐家匯駅構内に花屋を開店しました。オープン当初、店内は物珍しさとクリスマスプレゼントを求めるお客さまでにぎわいました。

そんな中、ほぼ毎日学校帰りに立ち寄ってくれる学生に気づきました。「00後」と呼ばれる2000年代生まれの若者たちは、「80後」「90後」同様6人(両親とその両親)の愛情を受けて育ちました。悪く言えばわがまま、よく言えばゆとりを持って育ってきた比較的不自由のない子供たちです。

そんな彼女らですが、店に立ち寄るとまるで宝探しをするかのように店内を見て回ります。時折友人を呼びつけ「これ…!」とか言い合い共感しているもよう。またスマートフォンで気になる商品を撮影する人もいます。

しばらくすると何人かが小さな花束を購入します。ある日、店員が「プレゼントですか?」と尋ねると、「んっ? 自分用!」「机の上に飾るの!」とうれしそうに答えたそうです。

この話を聞いた時、以前自分が花束を贈って怒られたことを思い出しました。

知人の中国人の定年退職を祝う会に花束を持参したところ「ありがとう。だけどこの花束は無駄使いだ!」と結構本気で怒られたのです。「一生に一回だし…」「大変お疲れさまだし…」などと気持ちを伝えたものの、第一印象の「無駄遣い!」から変わることはありませんでした。

年の差があるものの、ここまで感覚が違うと時代背景の大きな違いを考えさせられます。高級ブランド品を愛する年配者たちに対して、シンプルな自然体を好む00後。買いたい物が買えなかった時代から、買いたい物が買ってもらえる時代にシフトした今、個人の多様な価値観が育っている気がします。

最近では、毎日バラを1本買う女性もいます。1本を持ち帰る彼女の後ろ姿はどこか満足げ。そして今日も夕方にはあの00後が小さな花束を求めてやって来ます。高級ブランド品ではなく自分らしさを表現できる小物たちを求めて。

(猪股さんは1969年生まれ。東京と上海で小売業のコンサルティングをしています)

徐家匯駅構内にオープンした花屋の店内

from NY

樋口　亜希子さん
＝佐渡市出身＝

新しい命 皆でお祝い

今年の夏、友人の出産祝いに、バックヤードでベビーシャワーを企画することになった。

アメリカ発祥といわれるベビーシャワーは、妊婦さんをお祝いするパーティーで、食事したり、おしゃべりしたり、ゲームしたりと盛りだくさん。本来は女性だけが招待されるのだが、最近は男性や子供も参加して一緒に祝福したりもするみたい。今回の私たちもそうだった。ニューヨークに来てから知り合って7年になる友人とあって、私にとっても良い思い出となった。

ギフトは、育児や妊婦生活で必要なものを妊婦さんが自分で登録できるベビーレジストリーというオンラインサービスで購入し、すべて郵送。妊婦さんは育児グッズをいっぱいプレゼントしてもらえるのだ。

当日、早めに集まった私たちは、すてきなパーティーにするべく早速準備に取り掛かった。DIYで作った壁に色とりどりのドーナツをくっつけたドーナツウォールディスプレーに日本のお菓子を何個かくくりつけたものを、木の枝で作った釣りざおで釣るフィッシングゲーム、生まれてくる赤ちゃんの体重当てゲーム用の色紙や、参加者全員からのビデオメッセージを撮影するカメラ機材など、実に盛りだくさんなセットアップが完了した。盛大なバーベキューやドリンクも用意された。風船を庭いっぱいにちりばめて、ゲストと主役夫妻を待つ。

真っ赤なかわいいドレスをまとった妊婦が登場すると、会場は一気に活気づいた。おなかが大きくなった友人の姿を見て私も思わずほころんでしまった。

おいしい食事とドリンク、友達とのおしゃべりで時間はあっという間に過ぎてしまった。私にもいつかこの日が来るのかな、と胸を躍らせたハッピーな1日だった。

(樋口さんは1980年生まれ。フリーの写真家として活動しています)

主役夫妻を囲み、みんなで撮った記念の一枚

from ブラジル

矢崎　愛さん
＝新潟市北区出身＝

陽気なノリ懐かしく

21年間住んだブラジルを離れ、オーストラリアにやってきた。シドニーに住む義妹と夫が一緒に仕事をすることになり、不況や治安の問題が悪化するサンパウロを後にした。サンパウロから40時間、家族でシドニーに降り立った。

着いた翌日、街の中心部を散策した。古い建物が美しく残り、緑が多い。ステキなカフェが並んでいる。道を行くアジア人の多さにびっくりした。

少し歩くと港に出る。海沿いに真っ白なオペラハウスが見えて子どもと一緒に大喜びした。盗まれないようにバッグを体の前に抱き抱えていなくていいことに気付き、肩の力が抜ける。ブラジルよりも格段に安全な国にいると思うとうれしくなる。

オーストラリアに着いた当初、語学学校に通った。毎朝バスに乗って中心部まで行き、美しいQVBショッピングモールにあるピアノをちょっと弾いてから学校に向かう。学校では人懐こいマレーシア人の少年から、勝気なレバノン人の初老の女性まで、いろいろな国籍と年齢の人たちと机を並べて学び、愉快だった。ちなみに、学校で一番多かったのが日本人とブラジル人。思わず笑ってしまった。

こちらの人は気取っていない。さっぱりした格好をして公園でピクニックやバーベキューをしている。電車の隣に座った上品なご婦人がお箸とお弁当を取り出して食べ始める光景にも出くわした。

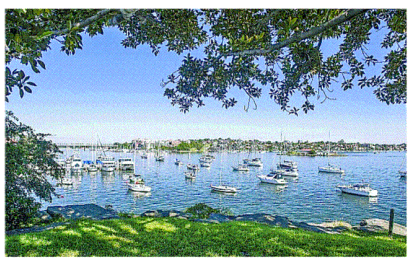
ブラジルは階級社会だからか、サンパウロの人々は身なりや行動に気を使う。女性は毎週サロンに通い、手足の爪やかかとのお手入れを怠らないし、ショッピングセンターに行けば子どもは新品の服に有名メーカーのスニーカーといった格好がほとんどだ。

ブラジルが懐かしくなることはたくさんある。子どもと見れば夢中でかわいがり、誰彼かまわずおしゃべりを始めて個人的なことも どんどん話してしまうノリを思い出す。

南米からオセアニアへ。相変わらず南半球にはいるけれど、日本がずっと近くなって自分でも意外なほどうれしい。季節は逆だけれど、時差はたった1時間だ。近いうちに遊びに行こう。

安全で人が少なく、カラフルな鳥の多い海の街での日々が始まった。

(矢崎さんは1977年生まれのミュージシャンです。現在はオーストラリア・シドニーに移住し、ブラジルのことを振り返ってもらいました)


自宅から車で20分ほどのエルキントン公園。港の風景が美しい(草村芳哉さん撮影)=シドニー